



TITLE:

カザーフ＝大オルダの種族集團

AUTHOR(S):

佐口, 透

---

CITATION:

佐口, 透. カザーフ＝大オルダの種族集團. 東洋史研究 1966, 25(2): 129-162

ISSUE DATE:

1966-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152725>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二十五卷 第二號 昭和四十一年九月發行

## カザーフⅡ大オルダの種族集團

佐 口 透

は し が き

モンゴル帝國解體後の、とくに十六世紀以降のユーラシア草原史の研究において、カザーフ民族が東モンゴル族や西モンゴル族（オイラート）と並んで、重要な位置を占めるものであることは、すでに筆者がしばしば指摘して來た如くである。カザーフ民族はチュルク系遊牧民として、ジュンガル王國、ウズベクの三汗國、清帝國、ロシア帝國とも政治的經濟的關係を結ぶなど、十六―十七世紀以降のカザーフ草原と中央アジアの歴史にも顯著な役割を演じている。カザーフ民族の民族形成（エトノゲネシス）は十五―十六世紀に行われたもので、その種族史の究明はモンゴル帝國期以降の中央アジア理解のための一課題となっている。しかし、カザーフ民族史の研究はウズベク諸汗國の研究とともに、資料が最も豊富なソ連邦においても未だ十分ではなく、もちろん、わが國の中央アジア史學でも取り上げられるには至っていない。しかしながら、ソ連邦、とくにカザーフ共和國（Kazakh SSR）においては、ここ十年以來、ロシアとカザーフ遊牧民との政治的經濟的關係についての文獻資料、とくに外交文書の整理編纂が盛んとなり、最近になって、かなりの量の史料集が刊

行されるようになった。尤も、十九世紀中期以後刊行されて来たロシア資料、研究文獻でさえ、現在の我々にとって組織的に入手することが困難であり、わが國での本格的な研究は容易ではない。他方、一七五〇年代からカザーフ(哈薩克)人と外交、經濟關係を結んだ清朝側の文獻はカザーフ社會に關するかなり詳細な記事を含み、すでに筆者はこの史料を利用してカザーフ汗王公の清朝に對する朝貢關係、イリ・タルバグタイにおけるカザーフ支配階級の通商活動の實態について研究した(佐口透『十八—十九世紀東トルキスタン社會史研究』一九六三年、二六一—三四四ページ)。カザーフに關する清朝史料はカザーフの支配階級や、イリ・タルバグタイ邊境地方に關しては比較的詳しく、ロシア資料の缺を補うに足るものがある。筆者は上記の研究に續いてカザーフ草原史の研究を進めるに際し、清帝國領に接する東南カザーフ草原、即ち、バルハシ湖周邊、イリ西岸からチュー、タラス河流域に分布する《大オルダ》カザーフ人の歴史に注目して来た。本論は、まず、ソ連邦でも本格的にとり上げられていないカザーフ大オルダの總體的様相と、大オルダのカザーフ人の種族形成を考察するものである。カザーフ大オルダをめぐるジュンガル、ロシア、コーカンド、清帝國間の國際關係、あるいは、カザーフ大オルダの政治史そのものについては、別稿に譲ることとしたい。<sup>①</sup>

### 一 大オルダの概念

カザーフ民族社會が十七世紀の間に、セミレチエを含む東南カザフスタン、中部カザフスタン、西部カザフスタンの、地理的經濟的に獨立した三つの地域に區分されたことはすでに通説となっており、この地域的區分はカザーフ語でジュズ(zhus)と呼ばれ、ロシア人はオルダ(orda, horde)とも呼んだ。カザーフ人の三つの大きな種族連合がこの zhus の基礎となっている。zhuz (または yuz) は百の意味ではあるが、カザーフ人では《部分》《地方》を意味する語になっている。セミレチエ、チュー、タラス地方はカザーフ民族の形成が最初に行われた地方と言われ、この地方に牧地を持つカザーフの種族集團は Ulu zhuz (大ジュズ) と呼ばれ、ロシア文獻では Starshij zhuz (古ジュズ)、または Bol'shaya

orda (大オルダ)と呼んでいる。その代表的な種族は Dulat である。《大》というのは、強力とか人口が多いという意味ではなく、實は起源の古さを表現するものであり、古ジユズというのが最も適切な表現である。次にカザフスタン中部、即ちトボル、イシム、ヌラ、トルガイ、サリスウ河を中心とする地方に分布するカザーフ集團は Orta zhuz (中ジユズ)と稱し、ロシア文獻では Srednij zhuz (Srednyaya orda)と呼び、その代表的な種族は Arghyn, Naiman であり、第三にシル河下流域、ウラル、エムバ、イルギズ、トルガイ流域には Kichi zhuz (小ジユズ)のカザーフ集團が形成され、Mladshaya orda (若または小オルダ)と呼ばれ、その形成は大・中オルダに比して新しく、十六世紀中期に崩壊したノガイ・オルダの部民を合併して成立したもので、その中心種族は Alchin である。これら三つのジユズのカザーフ人は人種、言語、文化などを共通としてカザーフ民族を形成したと見られる。清朝史料に見える烏拉玉斯、鄂爾圖玉斯、齊齊玉斯がそれぞれ Ulu yüz, Orta yüz, Kichi yüz に當ることなどは、すでに指摘したが(佐口、『東トルキスタン』二七三ページ以下)、こゝでは Ulu zhuz (以下、大オルダと譯する)の問題に限定して考察を進める。さて、ロシアのカザーフ草原に関する知識は十七世紀末ころより、通商關係を通じて、いくらか詳しくなるが、それも小オルダと中オルダの北部に限られ、従ってカザーフ草原の南東部を占め、ウラル、シベリアから最も遠かった大オルダについての知識は乏しく、また、不完全であつて、十八世紀の三十年代に至つて、漸く具體的に知られて来る。これより古い一六六六年の記録として Kazach'ya Bol'shaya orda (カザーフ大オルダ)という稱呼が知られるが(RMO, 53)、その詳しい事情は傳えられていない。

十八世紀になると、ロシアとカザーフ人との通商關係の發展、ジュンガルのカザーフ草原侵入に對するロシアの防衛策に關連して、大オルダについての記録が散見する。一七三一年十二月十六日付の通譯 M・テヴェレフ (M. Tever'ev) の小オルダ遣使日記によると、Bukenbai batur から聴取した話として、次のように傳えている (KRO-i, 62, 文書 No. 33)。

キルギズ・カイサツ・オルダは Uluyuz, Oretayuz [= Orta yüz], Kichiyuz の三つの部分より成る。Uluyuz (大オルダ) は他の二つから遠く離れ、ブハラ〔?〕方面に遊牧していて、中・小オルダとは寄り合わない。かれらには Cholbars という特別のハンがいる…。中オルダには Shenyaki Khan と Kochek Khan の二人のハンと Borak Salan 及び Abolmanet Salan との二人のサルタンがおり、小オルダには一人の Abulhair Khan と二人のサルタンがいる…。

ここでは Ulu zhuz (Ulu yuz) がカザフ草原の最南方に獨立していた状態に注目しておきたいが、Cholbars (= Tolbars) Khan など、政治上の問題については、ここでは省略して述べない。次にオレンブルグ探検隊長 I・キリロフ (I. Kirillov) の一七三四年五月一日付の、アンナ女帝へ宛てたオレンブルグ築城についての上奏によると (KROi, 107, No. 50; cf MIPSK, 21, No. 9, 一七三四年三月一日付の上奏文)。

キルギズ・カイサツ・オルダは誰にも從屬していない。かれらは人口が多く、戰鬪的であるが、今、陛下に臣屬しようとしている。すでに小オルダのアブルハイル汗は多くの長老たちと三萬の人々と共に、一七三一年にロシアに臣屬した……。

キルギズ・カイサツ・オルダは三つのオルダに分れている。第一は大オルダで、ここでは五萬人が集まることができ、特別の自分のハンを持ち、南東のブハラ、タシュケント、トルキスタン及びゼンゴル・カルムイクの支配者ガルダン・チュレン〔噶爾丹策零〕の〔領土の〕近くに遊牧している。西はカラカルバクと中オルダのカイサクと接し、北は草原と山岳に沿い、シベリアとウファ地方に達する。今、かれらはロシアに臣屬を求めて来た……。

第二は中オルダで Shenyaki Khan がいる。……第三は小オルダである……。

と述べている。大オルダ(及び中オルダ)に關するこの記事は一七三〇年代に屬し、ロシア側の知識としては最も古いものである。また、やや後年の、清朝が東トルキスタンを征服した年に當る一七五九年の一月二十二日付の陸軍少將 A・テ

ヴケレフらの報告によると (KRO-i, 579, No. 255)

すべてのキルギズ・カイサク族は古くから三つのオルダ、即ち、大・中・小のオルダに分れ、それぞれ、自分自身の支配者と長老を持っている。これはよく知られているので、説明を要しない。これらの中で、大オルダ（大というのは人口によるのではなく、古いことを示す）は、常にトルキスタン〔市〕とタシュケントの二つの都市のあなたに遊牧している…。そして、そのハンと長老は、初め、「小オルダの」アブルハイル汗を通じてロシアに臣属を請うたので、キリロフを通じて國書を送った。しかし、遠くにいたので、それとは関係が生じなかった。そのオルダは、ジュンガル支配者ガルダン・チュレンが強力なため、ジュンガルの屬國となった……

と傳える。これらの報道によると、Ulu zhuz というカザフ集團は Orta zhuz とは、やや隔たっていて、カザフ草原の南東部、タシュケント、トルキスタン地方からジュンガル王國本土と接する地方（イリ、バルハシ附近）に分布し、カザフ汗家とは別のチョルバルス汗に支配されていたこと、ジュンガル王國に征服されて、その屬國（いわゆる albaty）となっていたことが知られる。しかし、一七三〇年代において、M・テヴケレフ、I・キリロフらはカザフ族の歴史、政治組織、部族構成などについては具體的なことはほとんど傳えていないし、十八世紀中にも大オルダの内狀に關するまとまった資料は總じて乏しいので、我々は別の角度から諸種の史料を總合して、大オルダ・カザフ人の種族史的研究を進めることにしたい。

## 二 大オルダ・ウイスン考證

有名なカザフの學者ニ知識人、チヨカン・チンギソフ・ヴィチワリ・ハノフ (Chokan Chingisovich Valikhanov, (1835—65) は Predaniya i lengendy Bol'shoj Kirgis-kajatskoj ordy (「大キルギズ・カイサク・オルダの口碑傳説」) という論說の中で次のように述べてゐる (VALIKHANOV, I, 107—111)。

大オルダのキルギズ人「正しくはカザーフ人」は古代のモンゴル族 Usun の後裔である。その始祖を Maiki-bii と言  
い、チンギス汗の同時代人である。……ウイスンニ大オルダのキルギズ族の始祖を Tobei-bii と呼ぶが、これは Maiki  
よりずっと以前の人である。傳承によると Tobei には四人の子があり……その一人の Maiki から本来の Usun 族が  
出た。オルダ全體の名稱である Usun は廣く用いられているが、本来はウイスン族を指すものであった……

大オルダの物語によると、かれらはモンゴル族以前は別の民族であつて、ウイスン族の Maiki-bii はチンギス汗の即  
位の際に國會「クリルタイか？」に参加したという。……ウイスン族はチュー河のかなたにいて、ハンの居住地「トル  
キスタン」に隣接する地方にいた。

ワリハノフは十九世紀中期のカザーフ汗家の出身であり（ワリー汗の孫）、たとえ、學者・知識人であつたにせよ、十  
八世紀以前の大オルダの歴史を精確に研究し得たかどうかは疑問ではあるが、それにも拘わらず、かれの記事は重要な資  
料として價值を持つと見なければならぬ。まず大オルダのカザーフ人が Usun という種族名で總稱されていること、  
その始祖はモンゴル帝國時代の Usun というモンゴル族の Maiki というビーで、チンギス汗と同時代の貴族であるこ  
と、この Usun 族の名が大オルダカザーフ人の總稱として用いられたことが指摘されている。ワリハノフは Tobei-bii  
（この人物は不明であるが）から大オルダカザーフの諸種族（例えば Katagan, Mekren, Kangly など）が発生した  
という説話的系譜を傳えているが、この説話の批判はここでは深く言及しない。<sup>⑧</sup> 問題はモンゴル帝國期の Usun 族の  
Maiki が大オルダカザーフ人の始祖であるという傳承そのものである。傳承とは言え、Maiki というビー（ベク）は  
チンギス汗の即位の大會（クリルタイ）に参加した人物と傳えられているので、何らかの史實を反映していると推定でき  
るし、また、モンゴル帝國期の Usun という種族も何らかの史實に基づいているに相違ない。ワリハノフ以外でも、十  
八・十九世紀のロシア資料（KRO-ii）では、大オルダは юсун (yusun), оуисон (ouisun), уйсун (uisun), юсун  
(yusun) などと呼ばれ、Usun（または Usun orda）は大オルダのカザーフ人の總稱として廣く用いられている（以

下、ウイスンと寫す)。V. V. BARTHOLD (Semirechye, 81) は Usun を古代天山の烏孫 (Wu-sun) に比定しているが、音韻の類似や分布地の共通という點で兩者の關連性も思ひつかれるが、V. MINORSKY (BARTHOLD, Semirechye, 81, 註) はこの説を否定し、P. IVANOV (Ocherki, 42) も疑わしいと考えており、烏孫王國の解體狀況 (松田壽男博士『古代天山の歴史地理學的研究』(參照) から見ても、史實としては證據がないので、BARTHOLD の説はしりぞけたい。また、カザーフ共和國史第一卷 (IKSSR) が、烏孫がカザーフの種族構成の中に入ったとしているのも根據がない。

ウイスンの名稱が十九世紀初頭の清朝文獻にも記錄されていることは重要である。即ち、新疆識略卷十二によると、  
 哈薩克內、有伊克準、多木達準、巴罕準三部、伊克準即衛遜鄂拓克

とあり、伊克準 *ike zhun* は *mo. yeke jüz* (大ジヌズ) の音譯で、*yeke jüz* はまた *Ulu zhuz* (大ジヌズ) のモンゴル譯であり、これが衛遜 *Wei-sun* 鄂拓克 (*otok*) に當るとの意であり、つまり、大オルダは *wei-sun*  $\searrow$  *uisun* と呼ばれていたことを示す (多木達準 *dumda zhun*  $\equiv$  *Orta zhuz*, 巴罕準 *bagha zhun*  $\equiv$  *Kichi zhuz* であることは佐口、前掲書參照)。新疆識略卷十二によると、衛遜の二十五オトックは伊犁卡倫の西、數站の地方 (即ちセミレチエ以西) に分布すると傳えているが、他に、威孫 *Wei-sun* (高宗實錄卷一四四四、乾隆五十九年一月壬寅)、玉孫 *Yu-sun* (西陲總統事略卷十一) も同じく *Usun* (*Yusun*) の漢譯名で、十八世紀末の清朝當局でも、この種族名はよく知られていたのである。さてチングス汗時代のビーといわれる *Maiki* は當時のモンゴル領主即ち *noyan* 階級の人であり、*Maiki* という人物は當時の記錄には直接見當らないが、カザーフ草原に關係があると見られる觀點から、ジュウチウウルの部族・軍事組織について RASHID AL-DIN の記事を參照すべきである。RASHID (I-i, 274) はジュウチウウルの千戸について、こう傳えている。

ジュウチの四千戸



1. Munghūr 千戸。Sijūt 族出身、バツの時代に左翼軍を指揮した。

2. Kingitai Kūtān-noyan. Kingit 族出身。

3. Hushitai 千戸。Hushin 族エミールの出身、Boorchī〔?〕-noyan の一族の人。

4. Baigu 千戸。Hushin 族出身、右翼を指揮した。

以上がジュウチに分配された四千戸の軍隊で、現在〔十四世紀の初め〕、Tokhta (金帳汗) と Bayān (白帳汗) の軍隊の大部分はこれらの後裔である。

この記事で、まず注目されるのは Hushin 族出身の Baigu 千戸であり、この人物がワリハノフの言う Uusun 族出身の Maiki-bii に當るのではないかということであり、この假説のもとに、モンゴル帝國における Hushin 種族の足跡を検討してみよう。

さて、ジュウチの四千戸のうち Munghūr (元朝秘史の蒙客兀兒) Kūtān (RASHID, I-i, 177—8 参照) の二人は別として、Hushitai 千戸と Baigu 千戸とがともに Hushin 族出身であることが注意され、同時に Hushin 族の部民のいくらかもギンチャク草原に移動したであらうと見られる。次に RASHID AL-DIN (I-i, 171—2) のいわゆる《部族傳》の qaun-i Hushin (フーシーン族) の項を見ると、「Borāghul noyan はフーシーン族の出身で、チンギス汗の功臣であり、右翼のエミール (千戸) であつて、Boghorchī (博爾朮) noyan の副官であつたが、Tumat 族との戦いで殺された」と傳えており、また RASHID AL-DIN (I-i, 268) の右翼千戸の條にも「Hushin 族出身の Borāghul noyan について、大たい同じ記事をのせているが、Hushin 種族自體については詳しいことは傳えていない。ただ、モンゴル諸種族の分類上では、モンゴル族のダルレギン集團の中に入つてゐる Ushin 族 (RASHID AL-DIN, I-i, 78), 即ち Hushin 族が擧げられているが、その原住地や民族誌などは記されていない。元朝秘史にもチンギス汗の功臣「四駿 (dörben kültüd) の一人としての索囉兀 (忽) 勒 Borol の事蹟はもとより記されているが、そこでは、かれは Hushin

族の出身であることは記されてはいない。恐らく、Boraghuil がチンギス汗帝國の建設を見ないで、早く戦歿したので元朝秘史の記録を逸したのであろう。他方、元史卷一一九、博爾忽列傳によると、「博爾忽(Borogul~Boraghuil) 許兀慎氏」と出身を記し、元明善の太師淇陽忠武王碑(元文類卷二十三)には「謹按忠武王、諱月赤察兒、姓許慎氏、曾大父博爾渾也」として、元朝の武臣月赤察兒(Yue-chi-cha-er)の曾祖父博爾渾(Borogul~Boraghuil)が許慎氏の出身であると傳える。許兀慎 hū-wu-shen、許慎 hū-shen(音韻は『攷定中原音韻』による)はモンゴル原語では \*hūshin, \*hūshin (mo, \*hūgūshin) と推定され、RASHID AL-DIN のイルシン語形 hushin, または initial-h のなご ushin に當ることは疑いを入れず、さらに南村輟耕錄卷一の氏族、蒙古七十二種の中の忽神 hu-shên も許兀慎、許慎の變形であろう(ただし忽神忙兀歹とある語は重複による誤記であらう。PELLIOT, Campagnes, 71-73 に註釋がある)。

このように Boraghuil という人物を媒體として考えると、許兀慎 hū-wu-shen という種族名は RASHID AL-DIN の Hushin (or Ushin) に當ることは確實であり、チンギス汗帝國形成期における Hushin 族の實體は史料上はあまり明らかではないにせよ、この種族から Boraghuil 千戸とその子孫、ジュウチーウルスには Hushitai 千戸と Baigu 千戸という領主(noyan)が存在したことが指摘され、ジュウチーウルスにおける Hushin 族の Baigu は、ワリハンフが「チンギス汗家のベクで、モンゴル系 Uusun 族出身」と傳える Maiki に比定しうることは十分に可能と言わねばならない。

ここで Hushin 族出身の貴族たちについても少し窺って見る必要がある。まず、博爾忽(Boraghuil)の子孫としては、脱歡(Toghon), 失烈門(Sirentu)の後、月赤察兒(Yue-chi-cha-er)があり、ウゲデイ汗、マング汗及び元朝のクビライ汗に仕え、海都との戦争に武功を樹て、その子孫も元朝の武人・官人として榮えたことは太師淇陽忠武王碑銘に詳しい。また RASHID AL-DIN (II, 202) によると、ツルイの子 Qutuqtu(忽覲都)の子が Tukaī Būga であるが、その二女の Shirin aqā は Ushin 族の Tokchi-gūrgan の妻になったと云う(RASHID AL-DIN, I-II, 268) また Tok-

chi-gūrgan が、フラーグ汗の一族で Shirin という女と結婚したと傳える。次に、「アクリブカの子 Yūbākūr (玉木忽爾) は妻 Isūder の死後 [Isūder] Khātūn の家族から娶り、二子ができた (RASHID AL-DIN, II, 201)」と傳えられてゐる。RASHID AL-DIN (II, 155) のクビライ汗傳によると「クビライの妃の一人、Hushinjūn は Ürügül noyan の娘で、クビライの第八子 Ayāchi (愛牙赤) を生んだ」とあり、Ürügül noyan はもちろん Borāghul noyan の子で (RASHID AL-DIN, I, 172), じつでは Hushinjūn の代りに Üschin と書かれてゐる。

以上によると、元朝において Hushin 族と元帝室との間の婚姻が行われており、Hushin 族は無名の種族ではなかつたようであり、前述のように博爾忽の曾孫月赤察兒は元朝において武功を重ねた重臣で、元明善は「惟天朝一家、九州四海、遐邇長威綏德者、蓋許慎氏與有力焉、惟許慎氏、五世六王六太師、始終恩數赫奕者、實天朝有大造焉」、宣平男婚帝族、女婚王家 (太師淇陽忠武王碑) 」と述べて、Hushin 族の月赤察兒の家系を稱えている。Hushin 族は元朝において決して無視できない種族であつたと見てよい。

次に Hushin 族の Baiqu 及び Hushitai がジュウチウウルの千戸長として移動したキプチャク草原においては Hushin 族はどのような變遷を示したか。まず、Hushin 族についての記事として、ハッシーの第二子 Tūqan の第三子である Munga-Timūr の三人の妃妾の一人として、Ushin 族出身の Sultān Khātūn という者がいたことも、やはり注目して置かう (RASHID AL-DIN, II, 72; PELLJOT, *Horde d'Or*, 50, note)。しかう、Baiqu と Hushitai 兩千戸のその後の事情が問題となろう。ジュウチの長子は Orda で、次子は Batu であるが、ジュウチウウルの汗位 (金帳汗) はハッシーが繼承し、オルダは金帳汗の兄として尊敬を受けたが、以後、オルダ家は Aq Orda (白帳汗) の支配者として金帳汗とは獨立の地位を占めることになった。ジュウチ他界後のジュウチウウルの軍隊について RASHID AL-DIN (II, 66) は次のように傳えている。

ジュウチの長子はオルダであるが、次子バツがジュウチ・ウルスの汗位を継いだ。ジュウチ汗の軍隊の一半をオルダが指揮し、一半をバツが指揮した。オルダはこの軍隊と四人の兄弟—*Üdär*, *Tugā-Timur*, *Shingkun* と共に「モンゴル」軍の左翼となった。それ以来、左翼の王と呼ばれている。そして、現在も「十四世紀初め」これらの種族は、オルダの種族と一しょにいる。かれのユルトとこれら兄弟のユルト・軍隊は「原文缺」邊境の左岸にいる。かれのウルスと諸子は常にそこにいる。最初からオルダの種族からバツの種族の汗のところへ行く機會はなかった、というのは両者は遠く隔たっていて、獨立の國をなしているからである。オルダ家はバツの代理者の如く見られ、ヤルリク（勅諭）では、バツの上位に署名する。*Qünjīn* の子の *Bāyān* は、今、オルダ・ウルスの王であるが……バツ・ウルスの王 *Tokhta* の地方の國境へ赴いた。

これによるとジュウチの軍隊は二分されて、オルダとバツの支配下に入ったわけで、即ち、サライを都とする *Altun Orda*（金帳汗）と、シル河北方、サリスウ河方面に根據をおく *Aq Orda*（白帳汗）の間に二分されたと言えよう。前述のように十四世紀の初め、金帳汗 *Tokhta* と白帳汗 *Bāyān* の軍隊の大部分はジュウチの四千戸の後裔で、他にロシア・チュルケス・キプチャク・マシヤルの軍隊が編入されているが、*Hushin* 族の千戸の所在については知るところがない。しかし、*Hushin* 族の集團が金帳汗國にも白帳汗國にも分布したであろうことは當然推定できる。

*Hushin* 族がキプチャク汗國解體後もなお、その種族的存在と傳統とを今のカザフ草原において保持したことについては諸種の根據がある。例えば十七世紀の中央アジア史家 *MAHMUD IBN VĀLĪ* の *Baḥr al-asrār*（神秘の海）によると「バツ汗の軍隊（キプチャクの軍隊）は *Argbyn*, *Oghuz*, *Naiman*, *Buirak*, *Uirat*, *Qarluq*, *Qoshochi*, *Usun*, *Ming*, *Qongrat*, *Kereit*, *Barlas* から成っていた（*AKHMEDOV*, 163）」というが、バツの軍隊を構成するチュルク・モンゴル系諸種族の中に *Usun* 族が含まれていることが注目される。また、*Tārikh-i Abul-Khair Khān* によると、金帳・白帳兩汗國の解體後、シェイバン家の *Abul-Khair Khān* の下に集團を形成した《遊牧ウズベク》の

軍隊は萬戶制によって編制されていたが、この《遊牧ウズベク》を構成するチュルク系モンゴル系諸種族は、右翼——Durman, Tubai, Chimbai, Uygur, 左翼——Burkut, Kiyat, Qonggrat, Naiman, Qoshochi, Mangyt, Ushun, Irtan, 中翼——Tangut, Utaj, Ukaresh-Naiman, Jat (jat ち Jalair の一部か), Khatai, Qartug, Keneges, Ichki, Tuman-Ming であつた (AKHMEDOV, 106)。十五世紀の東部キプチャク草原 (即ち後のカザフ草原) には、モンゴル帝國期に移動したモンゴル系諸種族の著名なものが數多く存在しており、そのすべてはすでにトルコ化していたであろうが、その中に Ushun 族が存することが知られる。この Ushun (Usun) 族がジウチウルスの部族を構成した Ushin 族の後裔、または種族的傳統をうけつたものであることは推定できる。Ushun 族の集團はバソールスにも白帳ウルスにも存続し、一三六〇—一八〇年に白帳汗の Tokhamysh が兩ウルスを統一し、一三九五年にトクタミシュがチムールに敗北を喫し、その後、東部キプチャク草原にシェイバン家の《遊牧ウズベク》集團が新たに形成されたときにも、その種族名を傳える集團が存続していたのである。

また、金帳汗國解體後、獨立して形成された Nogai 族の集團 (Nogai Ulus) の種族構成を見ると、十七世紀中期に在つた Mangyt (Qara-Mangyt), Qypchag, Kangly, Naiman, Qonggrat, Qytai, Uygur (Yugur), Ushun, Keneges, Ming, Nukuz などの種族があり (MIKK, 26)。この中に見えて Ushun をシタウチニウルス期の Hushin (Ushin) 種族名であることは疑いなく、十六世紀中の Nogai Ulus の構成分子となつたのである。やうして、一七四〇年代における Qaraqalpaq 民族を構成する種族として Qytai (Khitai), Qonggrat, Keneges, Mangyt, Qypchag, Uisun, Jabyu, Kiyat, Milan などの存在が知られ (MIKK, 52), Hushin (Ushin) の後裔が十六世紀中のカラカルパク民族集團へ参加したものに相違ない。

次に、一七四〇—一八一八年にわたる中央アジア史を書いたベルシンの歴史家 'Abd al-Karim Bukhari ち Desht-i Qypchag ち Qazaq ち Qazaqlar (ABDOUL KERIM BOUKHARY, 195—6)。

タシケント、コーカンドからアンディジャン、ナマンガン、カシガルに至る地方の種族〔tribu〕は Qounghourat [Qongrat], Houchan, Orta Yuz, Qirghiz, Tèmh など、數え切れない。これを支配するのは Khouday Bandeh Sultan である……

ブハラからロシアへの交通路は……トルキスタン市から出發して Qounghourat, Houchan, Orta Yuz の種族によって占められる地方を横切つて、ロシアの國境の Qizildar に到達する

PELLIOT (Kalmouke, 95) が Houchan を RASHID AL-DIN の Hushin に比定したのはさすがに炯眼と言ふべきであるが、さらに私の考察を加えれば、シル河下流域やトルキスタン市北方草原に分布する Qounghourat はカザフ中オルダ（一部は大オルダへ移牧）の Qongrat 種族に、Orta Yuz は中オルダに、Houchan は Hushan に、Qyrghiz は多分 Qara-Qyrghiz (Burut), Tèmh は Tama (小オルダの種族) にそれぞれ比定される。これらの種族の支配者といわれる Khudā-bandeh Sultān (Khouday-mandeh Sultan) がカザフの王公とすれば、Ishim Khan (一五九八—一六二八) の子に當る (LEVSHIN, Kazaks では Syrdak に當る) と見るのは時代がかけはなれすぎるから、イシム汗五世の孫 Khudāi-mandeh Sultān に當るものとせよ (VALIKHANOV, II, 482—3, Rodoslovnoe drevo kajsatskikh khanov i sultanov)。これにせよ Hushan ~ Hushin という種族名が十八世紀ころのカザフ草原南部、シル河流域に傳わっていた一證である。以上によつて見ると、モンゴル帝國解體後の東部キプチャク草原（今のカザフ草原）に分布した Ushun (Usun) 種族または種族名は、十三—十四世紀のキプチャク汗國における Hushin (許兀慎) の權威ある傳統に由來するものと見なすに十分な根據があろう。しかし、この問題を議論する前に、東方における Hushin 族の後裔についても考察しておきたい。

蒙古源流によると、チンギス汗のナイマン討伐の條に、'Ugusin-ū Bororul noyan [漢譯では烏古新之博囉郭勒諾延] という語が見えるが (SCHMIDT, 86)、モンゴル文の Bororul は滿文・漢文テキストでは Borol となつており、ま

た、史實から見れば、Bororui は RASHID AL-DIN、元朝秘史、元史の Borāghul, Boro'ul, 博爾忽 (博羅渾) に當ることは疑いなく、しかも元朝秘史に記載のない mo. Ügüsin < \*Ü'üshin, Üshin, 許兀慎 という種族名が附記されていることが注意される。とくに書寫モンゴル語としての ügüsin という字形に注目したいが、さらに蒙古源流の各所に、また、明朝の諸史料にこの Ügüsin に當ると見られる種族名がしばしば傳えられているので、蒙古源流の本文と和田清博士の研究成果に基づいて、必要な記事を抄出して、この問題を検討してみたい (PELLIOT, Campagnes, 72 にも考察がある)。

さて、ダヤン汗時代に土默特<sup>1</sup>の王公、和賽塔布裏 (Qoosai Tabunang) が右翼濟農 Bars Bolod を扶養したことを述べた條に、「Ordos Köbegü-tün Temür, Ügesin-ü Brsoroli, Qurci, Dalad-un Cöi Türgen (蒙古源流卷六、SCHMIDT, 187)」とあり、Ügesin (≈ Ügüsin) は Dalad などと共に旗、部落名を指すものである。次に右翼濟農 Bars Bolod の第三<sup>2</sup>に Labur Taiji とあり、「Labur Taiji kii murai jiltei, Tümed-ün Ügüsin degere...[satujuqu]... (SCHMIDT, 207)」とあり、漢譯本では「拉布克台吉佔據土默特之烏古新而居」と記している。この時、Bars Bolod の長子 Gün Bilig Mergen Jinong は Ordos を領有し、次子の Altan Khan は十二土默特を支配し、その他の諸子が内蒙古の各地に根據をおいた事情は和田清博士「中三邊及び西三邊の王公について (和田清、『東亞史研究蒙古篇』)」に詳しい。上文によると、土默特に Ügüsin (Ügesin) という部落があったことが知られるが、これは元代のモンゴル種族名 Üshin に起源すると見られる。また、順義王六大部落の一つに兀慎打兒漢刺布台吉があり、これは Bars Bolod の第三子 Labur Taiji が土默特における兀慎 (Üshin) 部の地方を支配したことを示し、また、滿官嗔 (Mongroljin) 六營の一つとして傳えられる兀甚も兀慎の異音譯であり、兀慎部は大同鎮外胡芦海子附近であるという (和田清、前掲書)。兀慎 Üshin は烏古新に當り、mo. Ügüsin の音譯に他ならない。蒙古源流卷七によると一五五八年、歸化城に来て「ダヤン汗の葬儀に參列したダライハラムはさらに東方の土默特諸部に巡錫したことを記して (SCHMIDT, 251)」、

tendeče Qaračın Tümen-e ögede bolqu-yin jarura, Tümed-ün Üsin, Bayarud, Borjigis, Maru Ming'an-u noyad jalaju……

と述べている。文中の Üsin は Ügüsin の別形（口語形）であり、Bayarud もモンゴル帝國期の種族名である。Tümed-ün Ügüsin (or Üsin) はハーン・汗國の Ügüsin 部落の意であるが、Böräghül の種族が Ügüsin (Hüshin 許兀慎) とすれば、上述の Ügüsin も元代における Hüshin 族の種族的傳統を引く後裔を指すものと見なされよう。内モンゴル諸部族名に、モンゴル帝國期の種族名が数多く残っている事實はよく知られ、それは果して種族（またはその家系）の殘存なのか、種族名のみの傳承であるのか、このような問題は改めて研究の必要があるが、蒙古源流箋證卷六に「鴻吉刺特 (Qongrat) を烏古新 (Ügüsin) は皆、元時の舊部である」と解釋しているのは當っていると言えよう。私も蒙古源流の Ügüsin (Ügesin, Üsin) は RASHID AL-DIN の Hüshin, 元史の許兀慎に當るものと考えた。

そして Bars Bolod の子 Gun Bilig Jinong と子の九子に Ordos の地を支配するに至った事情はすでに和田清博士によつて詳細に研究されているが、蒙古源流卷六 (SCHMIDT, 207) に「Nom Tarni ga becin jiltei (1524), Bararun rar-un Basud Üsin degere… [sarju] … (漢譯では諾木塔爾尼古據右翼田蘇特衛新)」とあり、これは Gun Bilig Jinong の子 Nom Tarni Qoa Taiji が Ordos の一角に Üsin (衛新 Wei-xin) 旗と云ふ部落を支配したことを示すもので、Tümed の Üsin 部がオルドスに移ったものである。Gun Bilig Jinong の阿爾朮斯四營の一つである偶甚の Ügüsin である（和田清、前掲書、七四六頁）。また、オルドスの Boşoqlu Jinong の明への出兵（一五九一）と云ふ「Bararun rarun Ügüsin-i Baratur Togo… terigülen orju çabcin yabuqui dur… (SCHMIDT, 259)」とあり、オルドス右翼の Ügüsin 部落の名が伝えられている。

ところで、祁韻士の皇朝藩部世系表、内蒙古表によると、清代のオルドス右翼前旗の祖で、清に降った郡王額琳沁 (L-rincin) の父の布達岱は、諾捫塔刺尼華台吉 (Noman Tarani Qoa Taiji) 即ち Nom Tarni Taiji の曾孫であると傳



えているから、今のオルドス右翼前旗は蒙古源流の *Baratun yar-un Usin* にあたる。この旗は正しくは *Ordus-un baratun yar-un emünetü qosırun* (オルドス右翼前旗) と呼ばれ、通稱 *Üshin* [mo. ügüsin, üüsin] 旗と呼ばれている (A. MOSTAERT, *Textes oraux Ordos; Dictionnaire Ordos*)。以上の諸記録に現われた *Ügüsin* (*Üshin*) とは、カザフ草原における *Ushun*, *Usun*, *Usun* の場合と同じく、チンギス汗帝國における *Hushin* 族の後裔、またはその種族的傳統を傳える集團と見なすことができる。

カザフの大オルダが十八、九世紀のロシア史料において *Usun* 族と呼ばれていること、*Usun* はチンギス汗時代のモンゴル族 *Usun* の後裔であること、*Usun* 族の始祖はモンゴル帝國の一領主 *Maiki bi* であること、——このようなカザフ學者ワリハノフの考察が單なる傳説ではなく、史實の裏づけがあるに違いないという立場において、私は *Usun* 族の種族名の説明を試みた。資料は十分ではないが、私は以下のように推測する。史料上は詳しく知られていないが、チンギス汗帝國成立當時に、モンゴリアには *Hushin* というモンゴル系の種族があり、チンギス汗の四傑の一人、*Borāghul* (博爾忽、博羅渾) は *Hushin* (許兀慎、\* *Hü'ushin*) 族の出身であるとわれ、*Hushitai* と *Baiqu* という *Hushin* 族出身の二人の千戸長 (*mingyatu noyan*, *emir-i hezāreh*) に率いられた二千戸の *Hushin* 集團はジュウチールスの主要部分を構成してキプチャク草原に移り、後に、バツリールスと白帳汗のオルダリールスの部族の一部となった。 *Baiqu* は恐らくワリハノフの傳える *Maiki bi* に比定される。キプチャク汗國の解體後、新たなエトノゲネシスの過程に現われたシェイバン家の《遊牧ウズベク族》、あるいはノガイリールス、さらにはカラカルパク族などの構成種族として傳えられる *Ushun* (*Usun*) は *Hushin* の後裔、またはその種族的傳統を繼承した集團と見られる。《遊牧ウズベク》から分離し、東方草原へ走った遊牧民集團 *qazaq* がセミレチエ地方で *Qazaq* 民族を形成した際にも、ジュウチールスの構成種族としての權威を持っていたに違いない。 *Hushin* (*Ushun*, *Usun*) 族の集團は、カザフスタン南東部の種族連合の中で重要性を維持し、やがて *Ulu zhuz* の中核種族となり、*Ulu zhuz* と *Usun* 種族名によって代表さ

れて、その總稱となったのであろう。また、白帳汗國では Jalair 族が有力な存在であったといわれるが (VALIKHANOV, I, 639, 註『ジャライル年代記』)、チャガタイ・ウルスにおいても Jalair は有力な種族であり、カザーフ・大オルダの Jalair はそれらの後裔であつて、カザーフの種族形成に参加した。Hushin 族の一部は元朝へも移住し、モンゴル帝室の數人と通婚する者もあつて、その種族としての地位も低いものではなかった。元朝崩壞後の内モンゴリアにも Hushin の種族的傳統は殘存し、Ügüsin または Üshin, Üshin として知られ、その集團はダヤン汗時代より土默特の一部落として知られ、オルドスにも移り、オルドス右翼前旗即ち Üshin 旗として殘つた。とくに、カザーフ草原では Hushin の種族的傳統、その種族名を受けつぐ遊牧民集團は長く續き、後述するように Dulat 種族とともにセミレチエ、チュー、タラス地方におけるカザーフの最初の民族形成にあたつてその中核となり、次いで大オルダ・カザーフ人の總稱 (Usun) となつたと見られる。この間の種族史は今後の課題として、さらに検討が必要であるが、大オルダ・カザーフ人が Usun と呼ばれている事實を究明することは、モンゴル帝國解體後の中央アジア遊牧民の種族史的研究の上に、いくたの手がかりを與えるものと言つてよい。

### 三 大オルダの種族集團

大オルダのカザーフ人は總稱して Usun と呼ばれているが、實際はいくつかの種族(または部族)から成り立っている。zhuz またはorda というのは、カザーフ汗國における三つの地域的行政的區分の稱呼であるが、カザーフ民族の民族形成において、チュー・タラス河、セミレチエ地方におけるカザーフの形成(古ジュズ、大オルダ)、中部草原におけるカザーフの形成(中ジュズ)、アラル海北方草原におけるカザーフの形成(若、小ジュズ)は、それぞれ個別的に行われたと言われ(IKSSR の見解)、古ジュズ、次いで中ジュズはモンゴル帝國期の傳統を持つ種族が多いことが注目される。ソ連邦の研究においても、カザーフの民族形成について實證的に分析した研究はなお乏しいようで、また、筆者にも

據るべき資料が乏しく、部族組織——とくに大オルダの——についての研究は困難であるが、以下、大オルダの種族集團の名稱や分布について、基本的資料によって整理するにとどめねばならない。

大オルダの種族とその分派に關する記録は十九世紀になってから多く傳えられているが、比較的古い記録として、一七八年九月二四日付で書かれたM・テヴェケレフの《カザーフの中・大ジューズの種族構成》という文がある(KRO-1, 407, No. 156)。ここでは中オルダについては略し、大オルダについてのみ述べるが、テヴェケレフはこう記している。

大オルダには十の種族 [rod] があり、それらは全體として Ouisyun と呼ばれ、それから、次の名稱の分派が分れた。即ち Boboi ouisyun, Cherm [= Chymyr?] ouisyun, Dzhanes ouisyun, Sikam ouisyun, Abdansuan ouisyun, Sary ouisyun, Sly ouisyun, Chanchecky ouisyun, Kanly ouisyun, Chalaer [= Jalair] ouisyun である。これらを支配するのはタシケントのハンである。この大オルダには一つの非常に強い Kongrad 種族 (rod) がいる。この種族は「がんらい」中オルダに屬する、というのは、昔から中オルダから分離し、大オルダの地方で、一しよに遊牧しているからである。Kongrad 種族は九つの氏族 (rod) に分れる……

この記事で Boboi ouisyun というのは Usun 族の Boboi 分派という意であるが、この記事全體としては完全な内容とは言い難く、少くとも最初の四つは種族名ではなく、その分派、恐らくは氏族名であると見られるし(後述参照)、他の資料でもそうであるが、種族と氏族とを同じく por と譯して、用語上の區別がない。LEVSHIN (Kazaks, 303) は TEVKEL'EF の覺書に據って(恐らく上述の資料) Grande-horde の種族 (face と tribu を區別す) に對して述べている内容を見ると、音譯は正確になっているが、テヴェケレフの記事を高く評價して、ほとんど無批判にこの原史料によったことが判明し、HOWORTH (II, 9) も LEVSHIN を不完全に引用している。テヴェケレフの記事も完全とは言えないし、また、一七八八年と言えば大オルダ・カザーフ人がジューンガルによって征服されていた時期で、これらの若干はトルキスタン、タシケント方面へ移動したことも考慮する必要がある。

大オルダリカザーフ人をいくらか組織的に記録した資料は十九世紀になって現われるが、それは大オルダがロシアの統治下に入り始めた時期で、諸種の變化を受けていたことを考慮して扱うべきであろう。比較的まとまった資料の一つは、一八二五年の文書で、『古ジユズ種族誌』というものである (KRO-ii, 223—4, No. 129)。これによると

大オルダのキルギズ「カザーフ」人はすべて Yusun と總稱され、かれらは五つの種族 (por) に分れる。即ち、1. Dulat, 2. Alban, 3. Dzhalair, 4. Chaprashty, 5. Suan である。これらの種族は次のような分派 (volost') に分れるという。ここで原文 por を種族と譯した理由は後で述べるとして、volost' (郷) はロシアの地方行政区であるが、その實際はよく分らないが、各民族集團を指すものであろう。また、VALIKHANOV (I, 540—543) の『大ウイスマニールダ族の種族区分』は上述の資料とかなり近い内容を持っているから、彼を参照する。ここで注意すべきは西陲總統事略卷十一、哈薩克源流に記載されているカザーフ部落表である。即ち、哈薩克 (Qazaq) に関する一般的記事の後に「其部鄂拓克 (otok) 名目今備載於左」として、中オルダ、大オルダ、及び、その他を含めて、總計一五一に及ぶ otok 名とその政治的支配者 (カザーフ汗家の khān と sultān たち) を列記しており、とくに大・中オルダの記事は詳細で、十八世紀末、十九世紀初頭の記録と見れば、ロシア資料と對照すべき記録であるが、PELLIOT はカザーフに関する清朝史料の註解において、この資料を利用しなかったのは惜しい (PELLIOT, Kalmouke)。この資料はイリの清朝當局がカザーフ使節などから聴取した記録として價值がある。以下、上述の KRO-ii, No. 129 の記載をそのまま表示し、それに相當する西陲總統事略の記事を對照させ、さらに諸資料に基づいて、それぞれの牧地、または分布地を簡単に添記し、これによってカザーフ大オルダの種族構成を概観することとしたい。

『古ジユズ種族誌』によると、例えば 1. Dulat は rod (種族と譯す) と規定され、それは八つの volost' (氏族集團を指す) から成っていることを示しているが、氏族や親族などの社會集團の考察はこゝでは手をつけず、1. Dulat, 2. Alban (or Adban), 3. Dzhalair (= Jalair), 4. Chaprashty, 5. Suan, 及び Chanchkly, Kangly, Sirgeli などの種

## 19世紀初頭の大オルダ種族・分派表

KRO-ii, No.129 (1825年)		西陲總統事略卷11(嘉慶14年 1809年)	ワリハノフ そ の 他
rod (種族)	volost' (分派)	玉孫鄂拓克 (yu-sun otok)	主要牧地
1. Dulat 〔都拉特, Dou-la-te〕	Chymyr Dzhanys Syikim Botpai Kashkaran Ysty Kyralash	齊莫爾 (Qi-mo-er) 嘉納斯 (Jia-na-si) 色和穆 (Se-huo-mu) 博特拜 (Bo-te-bai) 哈斯哈魯 (Ha-si-ha-lu)	チュー河・タラス河 チュー河 チュー河・タラス河 チュー河 チュー河 イリ下流
[Uisun] ←	Sary-yusyun	沙拉 (Sha-la)	イリ下流
2. Alban 〔阿勒班, A-le-ban〕	Segis-sary Ait-buzun Al'dzhan Kum-gerburyk Kyzyl-buryk Akkystyk Karakystyk	色柯斯薩拉 (Se-ke-si sa-la) 愛休博索穆 (Ai-xiu bo-su-mu) 阿勒占 (A-le-zhan) 洪烏爾博羅克 (Hong-wu-er bo-luo-ke) 和色勒博羅克 (Huo-se-le bo-luo-ke) 赫斯特克 (He-si-te-ke)	イリ河西 ケ ゲン, トルゲ ン, カスカ ラン河
3. Dzhair 札里雅爾 (Zha-li-ya-er)	Andash (以下, 11分派は略す)		セミレチュエ, カ ラタル河及びチ ュー河
4. Chaprashty 察劈拉西提 (Cha-pi-la-xi-ti)	Teke (以下, 6 分派は略す)		Dulat 部内に附 牧
5. Suan 索宛 (Su-wan)	Togarstan (以下 3分派は略す)		チュー, タラス 河, 2. Albanと 合同
Chanchkly 前齊赫哩 (Jian-qi-he-li)			タシュケント北 方
Kangly 杭勒 (Kang-le)			タシュケント
Sirgeli 錫爾格里 (Xi-er-ge-li)			トルキスタン市

KRO-ii の記事のなかで, 1.—5. まだが本文で, 以下の三項目は筆者の補記である。西陲總統事略の記事はすべて齊莫爾玉孫鄂拓克 (Qi-mo-er yu-sun otok) というように書かれているが, この表では種族・分派名だけを記し, KRO-ii, No.129 の記事と対照させた。ただし, 筆者の解釋により, 種族名と見なされる三つは3.4.5.のところへ添記した。〔 〕は, 他の史料からの補記である。ロシア語は機械的に轉寫し, トルコ語形に直さなかった。

族を考察の主な対象とすることにした。ちつ VALIKHANOV (I, 205—6, 124) によると

大オルダは四つの主な種族、即ち Dulat, Jalair, Abdan, Suvan から成り、かれらはまとめて Usun と呼ばれる。Usun というのは、上述の四つの種族と連合して大オルダをなして、その後、ジュンガルに併合された強力な Usun 種族の名から起ったもので、かれらは今も残存し、Dulat 種族に従属し、Sary-usun と呼ばれる

と言っている。これによると、本来の Usun は Dulat などと並ぶ大オルダの一種族であったが、あるいはジュンガルに征服され、合併されてから、勢力が弱くなり、一部が Dulat 種族の中の一分派となったものと見られる。以下、Ushuz を構成する數箇の主な種族の實態を検討して見よう。

1. Dulat. Dulat 種族は大オルダにおける最も有力な種族で、P. VELICHKO の一八〇五年三月二二日付の報告 (ERENOV, Ocherki, 106) によると、『大オルダの Dulat 種族は四つの分派からなり、四萬戸あり、自分の常住牧地を持っている。即ち、清朝國境、Kuluk (?), Kashghar, Kukan [=Khogand] の諸都市に近く、タラス河、アングレン河、チンギスニチャガン山〔バルハシ湖南の〕の附近に遊牧している』と傳へる。VALIKHANOV (III, 18) によれば「ザイリ地方は大オルダの二つの大種族 (rod)」、即ち Alban と Dulat (Chaprashty の一部を含む) によって占められている。Dulat のカイサク人は人口、戦闘力、富という點で、大ジューズの他のすべての種族より優れている。かれらは Alban の五倍、Jalair の三倍である。Dulat と Alban の數分派 (pokoleniya) と Chaprashty [族] の大部分はイリの西岸に遊牧している」と述べ、また、Dulat はチュー、タラス河流域にまで分布していると述べている (VALIKHANOV, I, 451)。ワリハノフと同じころチュー河地方を旅行した M. VENYUKOV (The Russians, 249) は大オルダについて、やや詳しく次のように記している。

大オルダの三つの主な種族 (division) は Djalaïr, Atban (これは Suvan を含む) と Dulat で、多くの支派があり、そのあるものはチュー河からタラスとボロルタイ山脈 (カラタウ山脈の南東) の方へ遊牧している。Dulat は Usun

と合同している。最も人口の多い種族は Dulat で、かれらは、チュー河の北東と、アラタウ山脈〔タラスのアラタウカ〕に至る地方からバルハシ湖南端とアルティン・エメル峠に至る地方を占め、そこから東方の Tugen 河に至る。さらに東方へも分布し、Chiliu [Shilik 河<sup>6</sup>]と Charyn [Sharyn 河<sup>6</sup>]に沿い、イリの右岸に沿っている。この地方〔イリ西岸地方〕を占めるのは Alban 種族で、その一部は清朝領内に遊牧し、牧地の税を支拂う。

やや不分明な記事であるが、Dulat 種族は Usun 種族を含んだ集團で、チュー河、タラス河流域の草原を中心として東はバルハシ湖南部、南はアラタウ山脈周辺からタシュケントに至る地方を占め、Alban (Adban, Atban<sup>6</sup>)と呼ばれる種族は Suvan 種族を含み、イリ河西岸に近く牧地を占めていたことが知られる。Dulat 種族の主な分派 (sub-division, 氏族) は Seikym (七〇五アウル)、『Jany's (一〇九〇アウル)』Botpai (七八五アウル)、『Chymyr (一七七〇アウル)』の四つが主要な代表的なものであったが (VENYUKOV, The Russians, 249)、『これについては深く言及しない』。

Dulat 種族の中に Sary-uisun (沙拉玉孫) の集團が加わっていることは前述したが、Dulat 種族を構成する Chymyr, Jany's, Seikym, Botpai などの分派が氏族名であるのに對し、『Sary-uisun はがらうい獨立の種族 Usun であったのが、ジンガルの侵略のため解體し (KRO-<sup>1</sup>, 258, No. 99, 一七四二年九月二十八日 Miller の日記)』その一部が Dulat 種族の一分派となったものらしい。VELICHKO の『キルギズ・カイサクの三オルダ誌』によると、『Sary-uisun は二分派、三千戸よりなり、トルキスタン市とキシル・オルダ(後のアク・リメ・チュート)間に牧地を持つ』と傳へ (IBRAGIMOV, 47)、『VALIKHANOV (I, 400) によると、『大オルダの中に Sary Usun (黄色のウイスン) という種族があり、かれらは自分を強大な民族の殘存と考えている』と傳える。これは、『前述したように、Usun 族がモンゴル帝國以來の有力な種族であったことを反映する傳承として注意される。Sary-uisun はイリ河下流とジュンガリアの邊境に住み、農耕化し、獨創的な家具の製造にも従事しているといわれるが (VALIKHANOV, I, 698)』分布地については、上述の VELICHKO の記事とはやや異なるようである。

Dulat 種族名の起源について想起されるのは Moghulistan 汗國の有力な氏族として Ta'rikh-i Rashidi に伝えられる Dughlāt との關連で、Dughlāt から Dulat という語形が生じたことは音韻的に十分承認される。Ta'rikh-i Rashidi (N. ELIAS, E. D. ROSS 英譯本)によると、モグリスタンにおける種族名として Dughlāt, Barlās, Merkit, Qaluchī, Karait, Uyghur, Bulaghāchī, Arulāt, Barin など二十數種が知られ、その半數は明らかにモンゴル帝國期のモンゴル系諸種族の後裔と見られる。その Barlās (Barulās) 種族はチャガタイ・ウルスの有力な千戶集團の一つであり (RASHID AL-DIN, I-i, 275) Arlāt (Arulāt) も有力な氏族であつたから (BARTHOLD, Uluġ-Beg, 9) その殘存は當然と言ふ。ところで Dughlāt については、モンゴル帝國期には有力な存在でなかつたためか、記録が乏しく (PELLIOT, Campagnes, 69—70) しかる RASHID AL-DIN の傳える gaum-i Dughlāt とは Ta'rikh-i Rashidi の Dughlāt と確かに比定される。RASHID の《部族傳》の gaum-i Dughlāt の項によると、「これは Tumbinai Khān の第八子 Buljar から分れ出た。チンギス汗がタイジウト部と戦つた時に、この種族はチンギス汗と同盟し、その軍隊と合流した。しかし、その時代にも、また、現在も〔十四世紀初頭〕、權威があつて有名な Dughlāt のエミールは誰も知られてゐない (RASHID AL-DIN, I-i, 193, なお I-ii, 28—30, 85—87 をも参照)」と傳える。チンギス汗帝國に Dughlāt というモンゴル系種族がいたことが確實であるにも拘わらず、何らかの理由で記録が乏しいが、モグリスタンにおける Dughlāt 家のアミールたちの地位から見ると、チャガタイ・ウルスの種族として天山からカシニガル方面に根據をおいていたのかもしれない。これについては明證はないが、モグリスタンの Dughlāt 族のアミールたちが政治的情勢からセミレチエに根據をおいていたという次のような事實が存する。

モグリスタンではドグラト家のアミールたちが權力を有してゐたことは周知の事實であるが、かれらの多くがセミレチエの草原と深い關係を持つてゐたことが注意される。十五世紀の初頭、イリに根據を置いた Vais Khān (1417—28, or 32) がセミレチエでオイラト族と戦いを續けた事實が想起され、また、ドグラト家のアミール Khudaydad の長子、



Muhammad Shah は Vais Khān から Uius Begi に任命され、Atbash (ナリン谿谷の都邑) に居住した。Vais Khān の歿後、汗位継承問題をめぐり、アミールたちの間に権力闘争が生じ、各地に獨立の形勢を示したが、Mir Karim-berdi は Ala-bugha (今のキルギズ地方) に要塞を築き、そこからフルガナに侵攻し、Mir Haq-berdi Bekichek はイシツクリール湖上の島に要塞を築いて立てこもり、トルキスタン、サイラム兩都市を掠奪した。また、Charās と Bārin 族のアミールたちは、當時チュー河畔を占領していたオイラートのタイシャのもとへ降って仕え、Qālūchi と Bulaghachi 族のアミールたちは《遊牧ウズベク》の Abul-Khair Khān に合流したが、モグリスタンの Dughlāt 族がセミレチエで遊牧生活を續けるようになったのは、このような事情に由るものである。

《遊牧ウズベク》の指導者 Abul-Khair Khān は十五世紀の後半にシル河中流域、カラタウ山脈周邊の諸都市を攻略し、チムール帝國領に迫り、モグリスタン西部へも進出したが、オイラートの反攻を受けて退いた。これより先、アブールハイル汗はウズベクの遊牧貴族、とくにチンギス汗統の سلطان たちと抗争を續け、とくに Girei Sultān と Janibeg Sultān は一四六五年ごろ、モグリスタンの Isān Buga Khān に招かれてモグリスタン西部(チュー河地方を含む)に投じたが、當時、この地方は、アブールハイル汗から分離した王公とその遊牧民の逃亡地となり、これらの《逃亡・分離者》が qazaq と呼ばれ、かくて十五世紀中期にセミレチエにおける新しい民族 Qazaq の種族形成の際の基本的分子となったと考えられる。この時の逃亡 qazaq 集團の中には、前述の Ushun (Hūshin) 族も含まれていたと推定され、Ushun (Uisun) はこのような政治的過程において《qazaq》集團の有力種族となったのであり、同時に、モグリスタン汗國の封建戦争の過程に、遊牧生活に執着を持つ Dughlāt 族の一部がセミレチエ、チュー河流域の草原に牧地を確保し、同じく《qazaq》集團と合流し、Ulu zhuz の中心種族の一つとなったのであろう。Ta'rikh-i Rashidi (p.82) にはセミレチエ、チュー河畔に二十萬人を算する Uzbek-qazaq 集團が出現したことを注意しているが、Dulat がモグリスタンの Dughlāt の後裔であることは以上の考察よりして十分推測されよう。とくに、Dulat 種族名が中オルダ・小オル

ダ、ウズベク、ノガイウルスなどの種族構成の中に全く見られず、Ulu zhuz のみに見られるのは、Dulat の十五世紀中期のモグリスタン起源を傍證するものである。チャガタイ汗家と密接な關係にあった Dughlāt の後裔としての Dulat 種族が Ulu zhuz において有力な地位を占めたのは當然かもしれない。従って、Dulat (Dughlāt) の起源を西突厥の《Dulu》即ち、都陸、咄陸に比定するソ連邦の東洋學者の説は全く根據がないと言つてよい (IVANOV, Ocherki, 41; Etnografiya narodov SSR. しかし IVANOV は Usun 烏孫説は否定している)。なお、ジャンニクの子のカシム汗 (Qasim Khan) がセミレチエから西方のカザーフ草原に支配權を及ぼし、中部カザーフ草原に形成されたカザーフ集團 (即ち中ジューズ) をも支配しながら、カザーフ汗家の初代のハンとなった過程などは、今は主題外であるので、ここでは言及しない。

さて、十六—十八世紀の間における Dulat 種族についての記録が全く乏しいのは、かれらの分布地がロシア本土から遠い中央アジアの奥地であるという地理的事情にも由る。カザーフ大オルダは十七世紀の中期から隣國のジュンガル王國に征服され、その貢納民 albatu となり、また、シル河下流域へ移動する集團もあったであろう。準噶爾全部紀略 (西域圖志卷首所收) によると、ジュンガル王國の鄂拓克 (otok) の中に多果魯特 Duoguo-lu-te と呼ばれるものがあり、また、西域圖志卷十三、伊犁西路の圖爾根の條に「圖爾根 (Turgen) 在伊犁郭勒 (Ili ghol) 南岸、塔拉噶爾東二十里、踰一支河至其地、舊爲準噶爾多果魯特鄂拓克遊牧處」とあり、PELLIOT (Kalmouke, 67) がこの記事に着目し、多果魯特 Duoguo-lu-te を Dughlāt=Dulat に比定しようとしたのは敬服される。イリ河南の Turgen 河は十九世紀には Aliban 種族の牧地であったが、Dulat 種族の一部も遊牧していた筈であり、また、そうでなくても、ジュンガルが Dulat 種族の一部をイリ河岸に移して otok を編成したことも有り得るところで、多果魯特が本來のジュンガル部人でないと思へば、それは Dulat にあてることができよう (ジュンガルの捕虜部落については佐口透「タランチ人の社會」、史學雜誌、一九六四年、七三一—一、一一五二頁參照)。なお、宣宗實錄の道光十六年十一月戊子條に都拉特 (Dou-late) 鄂拓

克と見えるのは Dulat 種族を指すものであるが、筆者の検索の範圍では、清朝實錄ではこの一例しか見當らない。

2. Alban 種族。Alban は訛つて Adban と呼ばれ、VALIKHANOV (II, 224 ; III, 18) に於て Alban はイシククリール湖の北方、イリ河西の Turgen 河から Kaskalan 河に至る地方を夏の牧地とし、一部は清帝國領のイリ邊境にも移牧したが、その人口は前述のように Dulat の五分の一であつたという。Alban の種族史はよく分つていないが、Abdan (Alban) は Suvan を含むと言われ (VENYUKOV, The Russians, 249)、高宗實錄卷六五、乾隆二十七年二月壬午條に哈薩克的阿卜丹素旺鄂拓克 (Abdan-suvan otok) の名が傳えられてゐる。

3. Suvan 種族。この種族の系統も不明であるが、VALIKHANOV (I, 451) に於て Abdan 種族と合つてチュエ、タラス河北方に遊牧しているというが、上述の VENYUKOV の報道とはやや異なる。

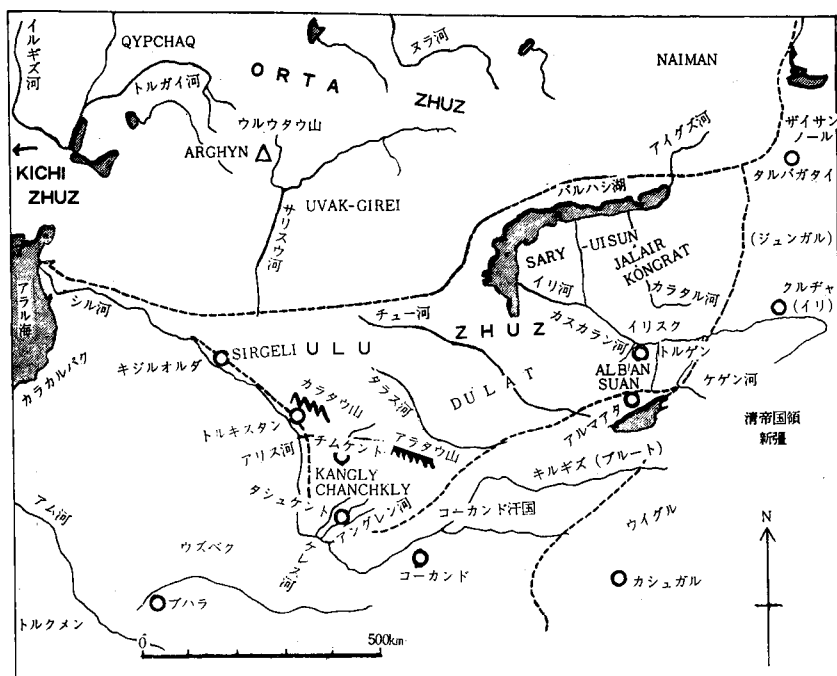
4. Dzhalaïr (Jalaïr) 種族。西陲總統事略卷十一が記す札里雅爾 Zha-li-ya-er は Jalaïr に當ると見られ、チャガタイウルスの Jalaïr 族 (ホーシンドに所領を持つてゐた) 及び白帳ウルスのジャライル族に起源を持つものである。一七四八年には Ulu zhuz の Jalaïr 種族の存在が知られ (KRO-i, 425, No. 166)、VALIKHANOV (I, 451) に於けると Jalaïr 種族は Dulat 種族と共にチュエ、タラス河北方に遊牧してゐたと言われ、また、カラタル河流域 (セミンチエ地方) など、大オルダの北方地帯に遊牧しているとも傳えられる (VENYUKOV, 249)。

5. Chaprashy 種族。この種族の起源は不明であるが、十九世紀には、前述のように Dulat 種族と合して遊牧してゐたという。

以上の五つの種族が、『古シユズ種族誌』の傳える大オルダの有力な集團であるが、その他に Chanchkly, Kangly, Sirgei なども大オルダの種族として知られ、この點では、ほとんどすべての資料は一致してゐる。Chanchkly は清朝史料では纏齊胡里 Chan-qí-hu-lí と書され (佐口、『東トルキスタン』三八五頁)、シルダリア河畔、タシケント附近に遊牧し、Kangly も同じ地方に住むが、これはモンゴル帝國期のキプチャク系の Kangly の種族名を繼承してゐる。

る。VELICHKO によると、兩者併せて三千戸と言ひ、また Sirgeli 種族は二萬戸（戸はキビトカ・天幕の數）で、トルキスタン市とキシル・オルダ間に住んでゐる（IBRAGIMOV, 47）。また、十九世紀初頭（一八一三—一八一四年）の NAZAROV (p. 29) のコーカンド紀行によると、かれはトルキスタン市を経て、Ala-tau（タラス河南方）を河源とする Buraltai 河（アリス河の上流）附近に遊牧する「大オルダの一部である Yousoun-syrgeli 族」の牧地を通過してチムケントに到着したが、これは Usun（大オルダ）の Sirgeli 種族のことを指し、これによるとタラス南方に牧地を持つていたことになる。<sup>⑧</sup>

以上がカザフ・フリー大オルダを構成する主要な種族であつて、これらのカザフ人は十九世紀の初頭には、大たいにおいて Dulat 種族を中心として、東はイリ河西岸、バルハシ湖南岸とカラタル流域から、チュウ、タラス河流域、アラタウ山脈周邊へかけて、西はトルキスタン市を中心とするシル河下流域、南はタシュケント市の附近（アングレン・ケレス谿谷）に分布してゐたことが明らかである。Alban (Suvan を含む) 種族はイリ河西岸のケゲン・トルゲン・カスカラン河地方に分布し、ジュンガリア（清帝國領）に最も近く、Usun の流れを引く Sary-usun と Jalair 族はバルハシ湖南岸に牧地を有したと伝えられ、Sirgeli 族はトルキスタン市の西方、Kangly, Chanchkly 族はタシュケント附近に、最も人口の多い Dulat 種族の諸分派はチュウ、タラス河流域に分布してゐたと見てよいようである。十七—十八世紀におけるこれら種族の分布状況はもちろん十九世紀におけるそれとは差異はあつたに違ひないが、この點を確める資料は乏しい。しかし、カザフ草原中部で中オルダに屬する種族が Naiman, Arghyn, Qypchag, Qongrat などであつたのに對し、Dulat, Alban, Suvan, Jalair, Sary-usun, Chanchkly, Kangly, Syrgeli などが大オルダの種族として、十七世紀ころより、大たい上述の Ulu zhuz とかう草原・オアシス・谿谷の交錯する地域に分布してゐたことは確實である（地圖參照）。Ulu zhuz を構成する集團の總稱としての Usun はキプチャク汗國の Hushin (Ushun) 族に起源を持ち、Dulat はモグリスタンの Dughlat の種族的傳統を引いてゐると見てよい。Jalair, Kangly, Qongrat 種族もモンゴル



18世紀後期 カザーフ=大オルダ

帝國期に起源を持つ。LEVSHIN (Kazaks, 300)によると、大オルダにおけるカザーフ人口は七五〇〇〇キビトカ (三七五〇〇〇〇—四五〇〇〇〇人)、中オルダは一六五〇〇〇キビトカ (一〇〇〇〇〇〇人)、小オルダは一六〇〇〇キビトカ (九〇〇〇〇人)、合計してカザーフ人口は十九世紀初期においては二〇〇〇〇〇〇—二四〇〇〇〇〇人としてゐる。大オルダのカザーフ人口は四十萬前後と見られる。

私は大オルダを構成する Dulat, Alban, Kan-gly, Sari-usun, Chanchkly などを種族 (または部族) と規定したが、この問題をも含めてカザーフの社會組織、集團の構造についての考察は極めて不十分であることを認めざるを得ない。これについては、今後、資料を集めて研究したいが、ここで若干の補足をおきたい。まず、LEVSHIN は上述の Dulat などを race と規定し、Dulat を構成する諸分派、例えば Chymyr, Botpai, Jansy などに対しては tribu の定義を與へ (これに對し、

HUDSON, 63 はこれを批判してゐる) 'tribu はぐへひかの section に' section はぐへひかの parti に' parti はぐへひかの sous-division に分れると考察してゐる。KRADER (p. 198) は社會人類學者として、カザーフ人の部族制 kinship 問題について分析をおこなつてゐるが、その際 N. A. ARISTOV の一八九四—九六年の調査記録 (Opyt vyasneniya etnicheskogo sostava Kirgiz-Kazakov Bol'shoj Ord'y i Kara-Kirgizov. Zhiyaya Starina, t. IV, no. 3—4, 391—486. 筆者未見) を資料としてゐる。KRADER はゐるゝ例へは Dulat (この集團は division と定義されてゐる) は Botpai, Seikym など四つの clan (氏族と譯すべきか) からなり、この中づつ Botpai clan は Kudaykul と Chaghatai の二つの lineage (父系親族集團) からなり、この二つの lineage はそれぞれいづつかの sublineage からなり、Botpai clan は二四六五テント (戸數) '10000—12000 人より成り' Kudaykul lineage は七四三テント、Chaghatai lineage は一七二二テントより成ると述べてゐるのは、私にとって有益な指摘である。KRADER の見解をまゐるゝ Dulat (division)—Botpay (clan)—Kudaykul (lineage)—Bish-Imuk (sublineage) とする。division という用語は明確でないが、LEVSHIN の用語 race にあたり、私はこれを種族 (または部族) と見なし、clan (tribu) を氏族に當る集團と解する。lineage はその氏族を構成するいくつかの父系血族集團を指すものであらう。私は本稿では Dulat など、種族に當る集團の種族名、種族史、種族集團の分布地について考察したものであった。この種族の多くが、モンゴル帝國期の種族名を繼承してゐるのに對し、氏族名や lineage の名稱は ethno-historical な性格を持たず、各氏族の先祖や家系の個人名に由來するものであることに注目すべきである。社會人類學的方法によるカザーフ社會集團の構造については、他日の考察にまきたいと思う。

本論はカザーフ人大オルダの歴史的考察の基礎として種族史的考察を試みたものである。大オルダのカザーフ人は十七世紀後半にジュンガル王國に征服され、十八世紀の中期 (一七四〇代) まで、その屬領となり、ジュンガル王國崩壞後は、中オルダに根據を持つカザーフ汗家のハン及びスルタンたちの政治的支配を受けると共に、一部は清帝國領に移牧

し、その統制を受け、十九世紀初頭にはタシュケントを征服したコーカンド汗國の軍事的進出により、大部分はその屬領となり、他方、十九世紀初頭よりロシアの勢力も北方から大オルダ地域へ侵透して行くが、このような十八、九世紀の大オルダをめぐる政治史や大オルダ・カザフ人の運命については、別稿で述べることにするが、本論はこのような主題に對する豫備考察を試みたものであった。

## 註

本論で使用する主要文献とその略符號を以下に列記する。

## 史料集

- RMO.....Materialy po istorii russko-mongol'skikh odnoshe-  
 nij 1607—1636. Moskva 1959.  
 KRO-i.....Kazakhsko-russkie otnosheniya v XVI-XVIII ve-  
 kakh. Alma-Ata 1961.  
 KRO-ii.....Kazakhsko-russkie otnosheniya v XVIII-XIX ve-  
 kakh. Alma-Ata 1964.  
 MIKK.....Materialy po istorii karakalpakov. Sbornik. Mo-  
 skva 1935.  
 MIPSK .....Materialy po istorii politicheskogo stroya Kaza-  
 khstana. Tom I, Alma-Ata 1960.  
 文藝・博覧  
 ABDOL KERIM BOUKHARY ..... Histoire de l'Asie  
 Centrale (Afghanistan, Boukhara, Khiva, Khoga-  
 nd) depuis les dernières années du règne de Nadir  
 Chah (1153), jusqu'en 1233 de Hégire (1740—1818)  
 par Mir Abdoul Kerim Boukhary, publiée, tra-  
 duite et annotée par Charles Schefer. Paris 1876.  
 AKHMEDOV.....B.A. Akhmedov, Gosudarstvo kochey-  
 kh uzbekov. Moskva 1965.  
 BARTHOLD, Semirechye.....V. V. Barthold, Four studies  
 on the history of Central Asia. Translated from  
 the Russian by V. and T. Minorsky. Leiden  
 1956. Vol. I, History of the Semirechye, 73—165.  
 BARTHOLD, Ulugh-Beg.....V. V. Barthold, Four studies.  
 Vol. II, Ulugh-Beg. Leiden 1958.  
 BEKMAKHANOV.....F. A. Bekmakhanov, Prisoedinenie  
 Kazakhstana k Rossii. Moskva 1957.  
 ERENOV, Ocherki.....A. Erenov, Ocherki po istorii feo-  
 dal'nykh zemel' nykh otnoshenij u kazakhov. Alma-  
 Ata 1961.  
 HOWORTH, II-i, II-ii.....H. H. Howorth, History of the  
 Mongols from the 9th to the 19th century. Part  
 II. The so-called Tartars of Russia and Centra,

Asia. Division i, ii. London 1880.

HUDSON, Kazak.....A. E. Hudson, Kazak social structure. (Yale University Publications in Anthropology. Number 20). New Haven 1938.

IBRAGIMOV.....S. R. Ibragimov, Iz istorii vnesnetorgovykh svyazey kazakhov v XViii v. UZIV, 1958, tom XIX, 39—54.

IKSSR...Istoriya Kazakhskoj SSR. Tom I, Alma-Ata 1957.  
IVANOV, Ocherki.....P. P. Ivanov, Ocherki po istorii Srednej Azii. Moskva 1958.

KRADER.....L. Krader, Social organization of the Mongol-Turkic pastoral nomads. The Hague 1963.

LEVSHIN, Kazaks.....A. de Levchine, Description des hordes et des steppes des Kirghiz-Kazaks ou Kirghiz-Kaisaks. Traduite de russe par Ferry de Pigny. Paris 1840.

NAZAROV, Khokand.....Ph. Nazarov, Voyage à Khokand entreprie en 1813 et 1814. Magasin Asiatique. Oct. 1825.

PELLIOT, Campagnes.....P. Pelliot, Histoire des Campagnes de Gengis Khan. Cheng-wou ts'in-tcheng Jou. Traduite et annotée par Paul Pelliot et Louis Hambis. Tome I, Paris 1960.

PELLIOT, Horde d'Or.....P. Pelliot, Notes sur l'histoire de Horde d'Or, suivi de quelques noms turcs d'hommes

et de peuples finissant en "ar" (Oeuvres posthumes de Paul Pelliot II). Paris 1950.

PELLIOT, Kalmouke.....P. Pelliot, Notes critiques d'histoire kalmouke (Oeuvres posthumes de Paul Pelliot VI). Paris 1960.

RASHID AL-DIN, I-i, I-ii, II.....Rashid-ad-din, Shornik letopisej. Tom I-i, Moskva 1952; tom I-ii, Moskva 1952; tom II, Moskva 1960.

SCHMIDT.....I. J. Schmidt, Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses, verfasst von Saanang Setsen Chungtaidschi der Ordus. St. Petersburg 1829.

蒙古 歴史 卷之八 十八—十九世紀 東トルキスタン 歴史 卷之八 十八—十九世紀

VALIKHANOV, I, II, III.....Ch. Valikhanov, Sobranié sochinenij v pyati tomakh. Tom I, Alma-Ata 1961; tom II, Alma-Ata 1962; tom III, Alma-Ata 1964.

VENYUKOV, The Russians.....Capt. Valikhanov, M. Venukof and other Russian travellers, The Russians in Central Asia.....Translated from the Russian by John and Robert Michell. London 1865.

① ナザール民族の歴史 民族誌 現状を知るには IKSSR, HOWORTH (II-ii) など 次 著書が便利 である



S. A. Tokarev, *Etnoграфија народоv SSR*. Moskva 1958.

Narody Srednej Azii i Kazakhstana. II. Moskva 1963.

HOWORTH 著『編纂書』の『内容』も古くは十分注意して読む必要があるが、無価値とは言えない。IKSSR は通史として最もよくまとまっているが、カザフ汗家など支配階級についての記事が乏しく、また、文獻がついていない。

社會人類學的調査研究として注意すべき文獻は、最近の KRADER の著書の例に

A. E. Hudson, *Kazak social structure*. Yale University Publications in Anthropology. Number 20. New Haven 1938

がある。KRADER によれば HUDSON によれば、いずれも ethnos の問題、歴史的考察が不十分なことが指摘される。

カザフの民族誌的調査については Kazaki. Spornik statej antropologicheskogo otryada kazakhstanskoi ekspeditsii Akademii Nauk SSSR. Issledovanie 1927g. Leningrad 1930. など、その中で、特に S. I. Rudenko, Ocherk byta severo-vostochnykh kazakhov 著、貴重な實地調査報告として価値がある。

- ② HUDSON (Kazak, 20—21) がその informant から聴取した資料によると、大オルダの傳説上の建設者に二子があり、その一人の Abaq から四子、即ち Duvlat, Alban, Chapashtii, Suvan が生れたと云ふが、この説話を見れば、

③ Hushitai 及 Baigu 著 I. N. BEREZIN 本『集史』では「Hushidai Baigu」が一人の人物のように讀んでいるが、RASHID AL-DIN (I-ii) では二人の人物となっている。PELLIOT, Campagnes, 73 を参照。

④ RASHID AL-DIN (I-ii, 268) によるとウゲデイ汗の時代 Botaghul 千戸の長となつたのはその子 Jubakur-Qubilai であつたが、これは太師洪陽忠武王碑には見えないが、元史氏族表に、許兀慎氏の博爾忽の曾孫に當る木土各兒（朮不各兒）に當るかも知れない。

⑤ 「Hüüshin（許慎、忽神）オボフが、モンゴル族のタルンギン集團に屬し、隸屬のオボフであつた」という村上正二氏の考察は注意すべきであるが（村上正二、「モンゴル部族の族祖傳承（二）」、史學雜誌、一九六四年、七三—八、三八—ベージ）、實際は、この種族出身者には高い地位にいた者があつたわけである。

⑥ チンギス・チャカン山の正確な位置はよく分らない。私は以前に、この山の位置をバルハシ湖南と比定したが（佐口、「東トルキスタン」）、バルハシ湖の北にチンギス山があり、それかも知れない。PELLIOT (Kalmouke, 91) もこの點を考へ、當時の状況より見て、バルハシ湖の北ではあり得ないと考えている。

⑦ カザフとモグリスタンとの關係については別箇に考察すべきものである。ここで述べた Väis Khan 及 Dughlat 家については Tarikh-i Rashidi (英譯本); BARTHOLD, Semirechye; AKHMDOV, 56—59; 岡田英二「十五世・

紀初頭のモゴースターン——ヴァイス汗の時代(東洋史研究、一九六四年、二三—「一七頁」)などを参照したものであり、主眼外であるので、概観するにとどめた。

⑧

東トルキスタンのタリム盆地の水邊に住む Dolan (多倫、柔蘭) 人が Dughāt と關係があるかどうかは確實ではない(Dolan にては、佐口『東トルキスタン』参照)。

⑨

前掲の『大オルタ種族分派表』の 2. Alban の分派の中に Kungur buryk とアルン語形は kongur bōrk (褐色、赤黒い帽子) Kyzyl buryk と gyzyl bōrk (赤い帽子) である。また kystyk と aq-kystyk と gara-kystyk の白・黒

の分派となっていることに注意すること。kystyk と Qastek 時に由来するものか (BARTHOLD, Uluğ-Beg, 96)

⑩

チャグタイ=ウルスにちなみ Jalair, Barlas 種族とては BARTHOLD, Uluğ-Beg, pp. 9, 26—7 に、根本史料によつて考察すること。

⑪

Narody Srednej Azii i Kazakhstana. II, 325 に大オルタの種族構成が記載されている。これには特別の解説も附いておらず、一つの結論、または通説を掲げたのであろう。これによる。

Kangly, Sary-Uusun, Shanshlyly, Ysty, Oshaqy, Dulat (東域に属する Botpai, Shymyr, Sylykm, Zhany's), Zhalaityr, Sirgeli, Shaprashty, Abdan (Alban), Sur-an, Bes tangbaly

となっている。ch が新しい表音法で sh と寫されているだけで、すべて私が指摘して来た種族が示されているが、ただ

Oshaqy と Bes tangbaly とする種族については手がかりがない。BEKMAKHANOV (p. 100) はこれを Y. YU-ZHAKOV が一八六七年に書いた資料を引用して次のように述べている。

ローカンド権力下におかれたカザーフ人の種族は Bestamgaly, Seikym, Dzhany's, Chymyr 及び Bestangaly と交雑 (prirod) した Ysty, Oshaqy, Chaprashty, Zhalaityr, Sirgeli を含むことだ。

これを見れば、Seikym, Dzhany's, Chymyr は Dulat 種族の分派とみて、Bestamgaly とする集團は Jalair, Chaprashty, Ysty, Oshaqy とする種族の總稱のやうに見える。Bestamgaly は體た種族名ではなくていふ。上掲の Narody Srednej Azii i Kazakhstana は Bes tangbaly とあるが、この方は記事が混亂しているのではないかと思ふ。Bestamgaly とする集團が五つから成っていることより見て、besh tamghalyq (五のタムガ民) の意と推測される。tamghalyq とは貢納民を意味するから(佐口『東トルキスタン』一三六参照) Bestamgalyq とは恐らくはローカンド汗國に支配されて貢納を拂った五つのカザーフ種族の或る名をいふと恐むれる。なぜ、BEKMAKHANOV はこれを Bestamgaly の住地はタラス、チャー河の間、カラウ山の兩側及び Chymyr, Seikym, Dzhany's, 即ち Dulat 種族の三分派はカラタウ山周邊、タシケント北方を牧地としていた。

なお Qongrat (Konrat) はがらち中オルダに属して

いたが、大オルダ地區へ移牧したようで、KROU, 86, No. 49 (一七七九年七月二七日のリリンググレイン太尉の日記)によると「コングラト種族の大オルダキルギズ人は、同じく大オルダの Usun 種族のキルギズ人と戦争している」ことを傳えているように、種族間の紛争があつたことを知りうる。コングラト種族の牧地としては、セミレチュのカラタル河畔が夏營地、トルキスタン・タシュケント附近が冬營地であつたという(一八〇五年の VELICHKO の報告。ERENOV, Ocherki, 105—6 にする)。なお、上述の大オルダの各種族の場合でも、各分派ごとに夏營地と冬營地を持ち、距離的にかなり、かけ離れている場合も少くない。

⑫ VENVUKOV は大オルダの人口を 115,000 au(kibitka)と傳へ、BEKMAKHANOV によると、大オルダのキビトカ數を九五、〇〇〇とし、また、ARISTOV (前掲書)を引用して、全人口を五五〇、〇〇〇人としているが、これは十九世紀後半期の人口數を示す。カザフ人口統計については KRADER (p.190—1) の議論も参考となる。

〔補註〕 新疆西北邊境におけるカザフ人(大オルダの一部を含む)の分布状況については、筆者の「十八—十九世紀タルバガタイ邊境のカザフ遊牧民」(北アジア民族學論集、第3集、一九六六年十一月刊)を参照されたい。

この研究は昭和四十一年度科學研究費による「北アジア諸民族の種族起源・發生・系統論及び民族誌の總合的研究」の研究成果の一部である。

東洋史研究叢刊之十三

## 金 朝 史 研 究

外 山 軍 治 著

A5版クロース製 本文六七九頁  
附索引 定價 二、八〇〇圓

東洋史研究叢刊之十四

## 清 朝 前 史 の 研 究

三 田 村 泰 助 著

A5版クロース製 本文五〇四頁  
定價 二、五〇〇圓

東洋史研究叢刊之十五

## 唐 王 朝 の 賤 人 制 度

濱 口 重 國 著

A5版クロース製 本文五八〇頁  
附索引 定價 二、五〇〇圓

東洋史研究叢刊之十六

## 中 國 古 代 の 田 制 と 稅 法

— 秦漢經濟史研究 —

平 中 荅 次 著

A5版クロース製 本文五〇〇頁  
附索引 定價 二、五〇〇圓

(共に國內送料は本會負擔)

京都市左京區吉田本町京都大學文學部内

東 洋 史 研 究 會

振替京都三七二八番